

# 二〇一一年度 国語

(六十分)

答えはすべて 解答用紙 に書き入れること。

中一本

一 次の文章は、ヘルマン・ヘッセ作 高橋健二 訳の「少年の日の思い出」の全文です。読んであとの問いに答えなさい。

なお、本文は問題作成の都合上、一部表記の変更があります。

客は夕方の散歩から帰って、わたしの書斎でわたしのそばに腰かけていた。昼間の明るさは消えうせようとしていた。窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸に鋭く縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。ちょうど、わたしの末の男の子が、おやすみを言ったところだったので、わたしたちは子供や幼い日の思い出について話し合った。

「子供ができてから、自分の幼年時代のいろいろの習慣や楽しみごとがまたよみがえってきたよ。それどころか、一年前から、ぼくはまた、チョウチョ集めをやっているよ。お目にかけてどうか。」とわたしは言った。

彼が見せてほしいと言ったので、わたしは収集の入っている軽い厚紙の箱を取りに行った。最初の箱を開けてみて、初めて、もうすっかり暗くなっているのに気づき、わたしはランプを取ってマッチを擦った。すると、たちまち外の景色は闇に沈んでしまい、窓いっぱいには不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。

わたしのチョウチョは、明るいランプの光を受けて、箱の中から、きらびやかに光り輝いた。わたしたちはその上に体をかがめて、美しい形や濃いみごとな色を眺め、チョウの名前を言った。

「これはワモンキシタバで、ラテン名はフルミネア。ここらではごく珍しいやつだ。」とわたしは言った。

友人は一つのチョウを、ピンの付いたまま、箱の中から用心深く取り出し、羽の裏側を見た。

「妙なものだ。チョウチョを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそえられるものはない。ぼくは小さい少年のころ熱情的な収集家だったものだ。」と彼は言った。

そしてチヨウチヨをまたもとの場所に刺し、箱のふたを閉じて、「もう、けっこう。」と言った。

その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。その直後、わたしが箱をしまつて戻つてくると、彼は微笑して、巻きたばこをわたしに求めた。

「悪く思わないでくれたまえ。」と、それから彼は言った。「きみの収集をよく見なかったけれど。ぼくも子供の時、むろん、収集していたのだが、残念ながら、自分でその思い出を汚してしまった。實際話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

彼はランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプに載せた。すると、わたしたちの顔は、快い薄暗がりの中に沈んだ。彼が開いた窓の縁に腰かけると、彼の姿は、外の闇からほとんど見分けがつかなかった。わたしは葉巻を吸った。外では、カエルが遠くからかん高く、闇一面に鳴いていた。友人はその間に次のように語った。

ぼくは、八つか九つの時、チヨウチヨ集めを始めた。初めは特別熱心でもなく、ただはやりだったので、やっていままでだった。ところが、十歳ぐらいになった二度めの夏には、ぼくは全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのためほかのことはすっかりすっぱかしてしまったので、みんなは何度も、ぼくにそれをやめさせなければならぬまい、と考えたほどだった。チヨウを採りに出かけると、学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかつた。休暇になると、パンを一きれ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。

今でも美しいチヨウチヨを見ると、おりおりあの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、ぼくはしばしの間、子供だけが感じることでできる、あのなんともいえず、むさぼるような、うっとりした感じに襲われる。少年のころ、初めてキアゲハに忍び寄った、あの時味わった気持ちだ。また、そういう場合、ぼくはすぐに幼い日の無数の瞬間を思い浮か

べるのだ。強くおう乾いた荒野の焼きつくような昼下がり、庭の中の涼しい朝、神秘的な森の外れの夕方、ぼくはまるで宝を探す人のように、網を持って待ち伏せていたものだ。そして美しいチョウを見つけると、特別に珍しいのでなく、たつてかまわない、日なたの花に止まって、色のついた羽を呼吸とともに上げ下げしているのを見つけると、捕らえる喜びに息もつまりそうになり、しだいに忍び寄って、輝いている色の斑点の一つ一つ、透きとおった羽の脈の一つ一つ、触角の細いとび色の毛の一つ一つが見えてくると、その緊張と歓喜ときたら、なかった。そうした微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうたびたび感じたことはなかった。

ぼくの両親は立派な道具なんかくれなかったから、ぼくは自分の収集を、古いつぶれたボール紙の箱にしまっておかねばならなかった。びんの栓から切り抜いた丸いキルクを底に貼り付け、ピンをそれに留めた。こうした箱のつぶれた壁の間に、ぼくは自分の宝物をしまっていた。初めのうち、ぼくは自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、ほかの者はガラスのふたのある木箱や、緑色のガーズを貼った飼育箱や、その他せいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしよに、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。

ある時、ぼくは、ぼくらのところでは珍しい青いコムラサキを捕らえた。それを展<sup>てん</sup>翅し、乾いた時に、得意のあまり、せめて隣の子供にだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、非のうちどころがないという悪徳をもっていた。それは子供としては二倍も気味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱<sup>A</sup>だったが、こざいなのと、手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになっていた。彼はそのうえ、傷んだり壊れたりしたチョウの羽を、にかわで継ぎ合わすという、非常に難しい珍しい技術を心得ていた。とにかく、あらゆる点で、模範少年だった。そのため、ぼくはねたみ、嘆賞しながら彼を憎んでいた。

この少年にコムラサキを見せた。彼は専門家らしくそれを鑑<sup>B</sup>定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒぐらいの現金

の値打ちはある、と値踏みした。しかしそれから、彼は難癖をつけ始め、展翹てんしやうの仕方が悪いとか、右の触角が曲がっていると、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本欠けているという、もっともな欠陥を発見した。ぼくはその欠点をたいしたものとは考えなかったが、こっぴどいヒ評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。それでぼくは二度と彼に獲物を見せなかった。

二年たって、ぼくたちは、もう大きな少年になっていたが、ぼくの熱情はまだ絶頂にあった。そのころ、あのエーミールがヤマユガをサナギからかえしたという噂が広まった。今日、ぼくの知人の一人が、百万マルクを受け継いだとか、歴史家リヴィウスのなくなつた本が発見されたとかいうことを聞いたとしても、その時ほどぼくは興奮しないだろう。ぼくたちの仲間で、ヤマユガを捕らえた者はまだなかった。ぼくは自分の持っていた古いチョウの本の挿し絵で見たことがあるだけだった。名前を知っていながら自分の箱にまだないチョウの中で、ヤマユガほどぼくが熱烈に欲しがっていたものはなかった。幾度となくぼくは本の中のある挿し絵を眺めた。一人の友達はぼくにこう語った。「とび色のこのチョウが、木の幹や岩に止まっているところを、鳥やほかのテキが攻撃しようとする、チョウは畳んでいる黒みがかつた前羽を広げ、美しい後ろ羽を見せるだけだが、その大きな光る斑点は非常に不思議な思いがけぬ外観を呈するので、鳥は恐れをなして、手出しをやめてしまう。」と。

エーミールがこの不思議なチョウを持っていくことを聞くと、ぼくはすっかり興奮してしまつて、それが見られる時の来るのが待ちきれなくなった。食後、外出ができるようになると、すぐぼくは中庭を越えて、隣の家の四階に上つていった。そこに例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋を持っていた。それがぼくにはどのくらいうらやましかったかわからない。途中でぼくは、だれにも会わなかった。上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事なかった。エーミールはいなかったのだ。ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかった。

i

例のチョウを見たいと、ぼくは中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまつている二つの大きな

箱を手を取った。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのチョウはまだ展翹板てんせつばんに載っているかもしれないと思いついた。 ii そこにあった。とび色のビロードの羽を細長い紙きれに張り伸ばされて、ヤマユガは展翹板に留められていた。ぼくはその上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、C 優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。 iii 、あの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙きれの下になっていたのだ。

胸をどきどきさせながら、ぼくは紙きれを取りのけたい。D 誘惑に負けて、針を抜いた。すると、① 四つの大きな不思議な斑点が、挿し絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、ぼくを見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたという逆らいがたい欲望を感じて、ぼくは生まれて初めて盗みを犯した。ぼくはピンをそっと引っぱった。チョウはもう乾いていたので、形は崩れなかった。ぼくはそれをのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。その時さしずめぼくは、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

チョウを右手に隠して、ぼくは階段を下りた。その時だ。下の方からだれかぼくの方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間にぼくの良心は目覚めた。ぼくは突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。同時に、見つかりはしないかという恐ろしい不安に襲われて、ぼくは本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っ込んだ。ゆっくりとぼくは歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきたお手伝いさんと、びくびくしながらすれ違ってから、ぼくは胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

すぐにぼくは、このチョウを持つていることはできない、持っていてはならない、もとに戻して、できるならなににごともなかったようにしておかねばならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないか、ということを経験に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後にはまたエーミールの部屋の中に立っていた。ぼくはポ

ケットから手を出し、チョウを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、ぼくはもうどんな不幸が起こったかということを知った。そして泣かんばかりだった。ヤマユガはつぶれてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、繕うことなんか、もう思いもよらなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、ぼくの心を苦しめた。微妙なとび色があった羽の粉が、自分の指にくっついていてのを、ぼくは見た。また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかりもとどおりにすることができたら、ぼくはどんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちでぼくは家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中に腰かけていたが、ついに一切を母にうち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、すでにこの告白が、どんな罰を忍ぶことより、ぼくにとってつらいことだったということを感じたらしかった。

「おまえは、エーミールのところに行かねばなりません。」と母はきっぱりと言った。「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえの持っている物のうちから、どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして許してもらおうように頼まねばなりません。」

あの模範少年でなくて、ほかの友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。彼がぼくの言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということ、ぼくは前もって、はつきり感じていた。かれこれ夜になつてしまったが、ぼくは出かける気になれなかった。母はぼくが中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい」と小声で言った。

1。彼は出てきて、すぐに、だれかがヤマユガをだいなしにしてしまった。悪いやつがやったのか、あるいはネコがやったのかわからない、と語った。

2。二人は上

に上がっていった。彼はろうそくをつけた。ぼくはだいなしになったチョウが展翅板の上に載っているのを見た。エーミールがそれを繕うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかしそれは直すよしもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それは

3

すると、エーミールは激したり、ぼくをどなりつけたりなどはないで、低く、ちえつと舌を鳴らし、しばらくじっとぼくを見つめていたが、それから「そうか、そうか、つまりきみはそんなやつなんだな。」と言った。

ぼくは彼に、ぼくのおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡にかまへ、依然ぼくをただ軽蔑的に見つめていたので、ぼくは自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は、「けっこうだよ。ぼくはきみの集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、きみがチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」と言った。その瞬間、ぼくはすんでのところであいつのどぶえに飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。ぼくは悪漢だということに決まってしまう、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義をたてに、悔るように、ぼくの前に立っていた。彼はのしりさえしなかった。ただぼくを眺めて、軽蔑していた。

その時初めてぼくは、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを知った。ぼくは立ち去った。母が根ほり葉ほりきこうとしないで、ぼくにキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。ぼくは、床にお入り、と言われた。ぼくにとってはもう遅い時刻だった。だが、その前にぼくは、そつと食堂に行つて、大きなどび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。②そしてチョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押しつぶしてしまった。

問一 太線部A、C、Dをひらがなに直しなさい。

問二    に入れるものとして最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア すっかり      イ まるで      ウ せめて      エ はたして      オ あいにく

問三 傍線部①に使われている表現技法を答えなさい。

問四    に入れるものにして最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ぼくは彼に謝った

イ ぼくは彼にどんな言い訳を言おうか考えていた

ウ それでぼくは出かけていき、エーミールは、と尋ねた

エ ぼくはそのチョウウを見せてくれと頼んだ

オ ぼくがやったのだと言い、詳しく話し、説明しようと試みた

問五 傍線部②とありますが、主人公はなぜこのような行動をとったのだとあなたは考えますか。その理由を明らかにし  
 たうえて、解答用紙にあうように、200字以内で答えなさい。

二 次の二つの文章は、日本語について書かれたものである。読んで、後の問いに答えなさい。

A 今どきの言葉づかい

金田一秀穂

おしゃべりに使う言葉には、流行語といわれるものがある。若者どうしのおしゃべりには欠かせないものである。流行語を使うことによってしか伝えられない彼らの気持ちがある。おしゃべりについて考えるとき、彼らの言葉を無視できない。

日本人の大学生にも日本語学などを教えている手前、彼らとおしゃべりは、わたしにとって研究のネタの大事な取材の場でもある。

しかし若者の言葉づかいについて、いろいろ<sup>A</sup>ヒハンの<sup>B</sup>に<sup>C</sup>いわれることがある。「言葉の乱れ」とか、「日本語を破壊するもの」とか。

言葉は変化することが本質である、と昔の偉い言語学者が言っている。変化するけれど、だれかが変えようと思っても、変えることはできない。逆に、変化させまいとしても、そのままの形で保たせることは決してできない。

そうであれば、彼らの言葉を一方的にダメなものとして見るのではなく、言葉のおもしろさを表すものとして考えることもできるだろう。

それに、流行語というのは、全く新しい言葉ではない。たいていの場合、それは以前にもあった言葉の新しい使われ方であることが多い。「等身大」とか「<sup>B</sup>ヘンカクの時代」というのは昔にもあった。少し使われ方が変わっただけで、全く新しい語を作り出すことはできない。恐れるに足らない。

新しい語を今までの日本語に増やすということを考えると、外来語とか流行語は、日本語が豊かになるといいうように考

えることができるのだから、むしろ望ましいことかもしれない。

ら抜き言葉というのが問題になって久しい。「食べられる」というべきところを「食べれる」と言ってしまう。

i

や

ii

もら抜き言葉である。これについてはいろいろな議論があるが、わたしはら抜きでもかまわないと思う。ら抜き言葉は大正時代から現れていて、今に始まったことではない。自然の趨勢である。ら抜きを意識するあまり、「帰る」の可能形を「帰られる」にし、「行く」を「行けられる」にしてしまうほうが問題であろう。

「すごい暑い」という言い方は、本当は「すごく暑い」でなければならなかった。ちよつと小難しい言い方をすると、「すごい」は形容詞であり、用言を修飾するときには（動詞や形容詞の前に行くときには）、「すごく」という連用形にしなければならぬというきまりがある。ただ「すごい」という副詞が新しくできたのだと考えれば、「すごい暑い」は文法的に正しいということになる。

### B テレビ言葉の「聴き方」

梶原しげる

どんなに新聞や本で「日本語の乱れ」を憂慮しても、テレビの影響力の前には無力かもしれません。今やテレビは、多くの人にとって隣人、友人のような存在です。それが証拠に、「だれにも言えない悩み」をテレビでならうち明ける、なんてかたも珍しくはありません。しかしながら、テレビがよき「教師」であるかといふとかなり疑問があるのも確かです。しゃべる日本語を考えるうえで、まずは、テレビから出てきて、いつのまにかわたしたちの日常生活まで侵食してきた「変なしゃべり言葉」をみていきましよう。

「材料をおさらいしておきましょう。こちらになります。」

お料理番組で最後、「作品」ができあがったあと、みんなで試食する前に、司会者がこんなふうに言っていました。さらっと聞き流せばなんということもない言い方ですがわたしにはちよつと引つかかってしまうのです。

ファミリーストランのウエイトレスが料理を運んできて「こちらポークソテーになります。」ぐらいなら我慢もできますが、いやしくも公共の電波でものを言う人間がフリップを指さして「材料はこちらになります。」「お店の場所はこちらになります。」「電話番号はこちらになります。」「料金はこちらになります。」ってそれはないでしょう。

なんでもかんでも「なりません」を使おうというのは、「です」では、はっきり言いきる感じが冷たく聞こえやまいか、言葉が短くて間がもたないんじゃないか、丁寧な感じが不足するんじゃないか、相手がこちらに、<sup>c</sup>テキイを抱きはしないか、と卑屈になって、とりあえず、<sup>d</sup>ブナンに、という軟弱な心理が見え隠れしているように感じられます。

「電話番号はこちら、○○○の○○○○です。」とずばっと、明確に、潔く、しかもそれでいて聞き手を敬うように、メリハリと間をきかせて、丁寧な雰囲気で伝えるのがプロというものです。ある程度年齢のいったかたなら「<sup>e</sup>ございます」という表現も使ってほしいものです。「<sup>f</sup>ございます」なんて大時代な言葉はととてもとでも、というあなた。軽い調子で滑らかに発音すれば、意外と使い勝手のいい言葉として活用できるんですよ。

「こちら味噌ラーメンになります。」と「こちら味噌ラーメンでございます。」

あなたはどちらの店で食べたいですか？

「こちらが材料になります。」と「こちらが材料です。」「こちらが材料でございます。」

あなたはどちらの番組を見たいですか？

問一 太線部AとDを漢字に直しなさい。

問二 空欄

i

ii

には、ら抜き言葉の例が入る。当てはまるものを次のア～オから選んで答えなさい。

(順不同)

- ア 見れる      イ 読めれる      ウ される      エ 来れる      オ 慣れる

問三 あなたは、AとB、どちらの考え方に共感できますか。共感できる理由を明らかにしたうえで、解答用紙にあうように200字以内で答えなさい。